
悪夢

幽鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪夢

【Nコード】

N9452N

【作者名】

幽鬼

【あらすじ】

朝目覚めると俺は違う姿になっていた。これが夢だとしてもある男が変化した自分の姿に苦悩・葛藤する短編小説。

「朝目覚めると蠅になってる」なんて話をガキの頃読んだ記憶がある。あれはどこで読んだのか、今の俺にとつちやそんなことはどうでもいい。今大切なのは、俺がなったのは蠅でも無ければ猫でもない。いつそ生き物ならミジンコでもミカヅキモでもなんでも良かった。それがまさか、こんな姿になるなんて。

状況を整理しよう。物事には原因があり、そこから結果が生まれる。ということは、今俺がこんな姿になったという結果があるのであれば、原因もあるはずだ。俺は昨日の夜、何をしたのか。考えをめぐらせども答えは出ない。当たり前だ。昨日はいつもと変わらないう日々を過ごしていて、特段変わったことなんてしていない。

そこで俺は考える。ははーん、これはよくある展開だな。所謂「夢オチ」という奴だ。朝目覚めたら夢でしたー、なんて子どもだませないような結果が待ってるに違いない。だったら目を覚ますことだ。そうすればあの中肉中背の身体がもどって来るのだ。そうに違いない。

……ふと気付く。「この姿の俺」の意識ははつきりしている。これが夢の中だったとしたら、どうやって「寝ている俺」は目を覚ますのか。よく授業中に目が覚めるときには、高いところから落ちるだとか、この世のものとは思えない化け物に襲われるとかそういうたべたな展開に驚き、恐怖し目が覚める。だが「この姿の俺」は恐怖しようもない。今の俺は見慣れた散らかった部屋にただ転がって

いるだけだ。特にあたりを見回しても脅威となるものなどない。ここまでではつきり意識があり、しかも脅威がないとすれば、「寝ている俺」が目を覚ます要素などどこにも無いのではないか。

しかし他にも方法がある。「この姿の俺」が意識を失えば良い。夢の中で意識を失えば、「寝ている俺」が夢の終わりに気づき、目を覚ますはずである。

……だがどうやって気を失う？今の俺には意識はあるが、とてもじゃないが生命とは言えない姿になっている。モノに意識が存在するなんて聞いたことがない。この状況そのものがおかしいのは明白だから、モノがどんな時に意識を失うのかなんて考えようもない。「あり得ないものかもしれないとしたら」なんて考えるだけで頭がおかしくなってしまう。

考えれば考えるほどこの状況はおかしい。蠅だろうがなんだろうが動物である以上、脳味噌があつたり神経があつたりするわけだから、刺激に対して反応を示すのは当たり前だ。もちろん人間が見ているとおりにこの世界を見ている保証はどこにもないが、少なくとも蠅は害を逃れようと飛び回る。夏場のあの蠅の鬱陶しさがそれを物語っている。だが「この姿の俺」はどうだ？神経なんてあるわけも無ければ、脳味噌なんて毛ほども存在しない。ただのモノなのだ。それなのに意識があるというのはおかしいではないか。考える器官そのものが無いのだから、「俺」という自我は存在しようがない。なのに今の俺はハッキリと意識を持っており、自分が「この姿に変化してしまった」という記憶も持ち合わせている。考えれば考えるほどおかしい。頭が痛くなりそうだ。といっても痛くなる頭自体、

無いのだが。

この際視覚だの意識だのことは考えずにおこう。問題はどうかしたらもとの姿に戻るかだ。もう一度自分の姿に目を向ける。どこで見て、どこから見ているのか皆目見当はつかないが俺の意識にはつきりと俺の姿が映る。基本的な形は円柱だ。だが先頭部だけは細くなっており、そこには中身が漏れないよう封がしてある。昨日買ってきた×××である。俺の意識ではそれがどんなもので、どんな風に使われているかが分かるのだが、いざ思い出そうとしてもその名称が出てこない。間違いなく昨日の夜買ってきた×××で、これの中身を　してから寝た。これまたその行為自体覚えているがうまく思い出せない。ともかくどこからどう見ても×××であり、人間の姿はしていない。

自分の中身はほぼ空っぽである。これは俺の人格的なものではなく、文字通りほぼ空っぽなのである。それもそのはず、昨日の夜寝る前にほとんど　してしまっただからだ。だが大事なのは「ほぼ」という部分だ。なんとも中途半端に中身が残っている。それは一息に　できるほどの量なのにもかかわらず、である。×××としての俺の役目はそれを保存することであり、もしこの中身がなくなれば用済みとなる。一方、俺の中身は　するためのものだから、すべて無くすのが当たり前だ。つまり中身を守るのが×××である俺の使命であるが、その中身を　することが前提なのだ。使命を果たしてしまえば捨てられていくだけである。そう考えるとどちらが自分にとって良いのか分からなくなる。このまま中身を保存し続けるべきか、それとも天寿を全うすべきか

そんなことを考えてどれくらい経ったのだろう。「この姿の俺」の意識は相変わらずはつきりしているし、どうやら疲れを感じないようで眠くもならない。本当にこれが夢だとしても、「寝ている俺」が目覚める要素などないわけだから、一生このままの姿で生きるのかも知れない。この場合、「生きる」と言っても意識だけの存在なのだから「死」など存在しない。だがそれでも良いと思えてきた。今までぼんやりと生きてきた俺と今の俺。そこには、果たして差があると言えるのか。

時間が経過するにつれ、だんだんと俺は人間だったのか疑うようになってきた。もとは×××で、「寝ている俺」が夢なのではないか。自分の名称を思い出せないのは、覚えていたとしてもすぐ中身をされ捨てられるからではないか。名前や名称はそれを示す客観的符号で、存在が確定しているものにつけられる。自分が捨てられると分かっているのに、いちいち名前など覚える必要もあるまい。俺が誰なのか、俺の中身を　　する人間様にとってはどうでもいいことなのだ。

もう一度自分の姿を見る。そういえばラベルのようなものが巻きつけてある。そうだ、「寝ている俺」はこのブランドのこの名前のついたものが好きだったのだ。だがあくまでも好きなのはラベルに書かれた名前であり、中身である。×××自体を好きだったのではない。ラベルと中身が合っていれば、それを入れるものがパックでもよければ缶でも、瓶でもよい。×××である必要性は皆無なのだ。それらに比べ俺は保存性に優れているだけで、一口で　　する人間様には返って不便なものなのだ。それならば、俺の存在意義は今この中途半端にも残された中身なのだ。だがこんな量、誰が気にする？今まで大事に守り続けてきたこの中身そのまま捨てられる可能

性だってある。じゃあ俺は何のために×××として生まれ、この中途半端な中身を守ってきたのだ？

ふと目が覚める。やっぱり、夢だったのか。夢オチもたいがいにしゃがね。

男は机の上に転がっていたその中身を空にし溜息をついた。だが男の意識はまだどこか、ぼんやりとしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9452n/>

悪夢

2010年10月9日16時41分発行